

# 兵庫県神河町所在古墳群の測量調査

京都府立大学文学部考古学研究室

菱田 哲郎・井上 直樹・向井 佑介・藤原 光平

大平 理紗・川崎 雄一郎・岩元 亮祐・近藤 史昭

陰地 祐輝・新尺 雅弘・寺岡 潤一郎

## 1. 調査の目的と経緯

兵庫県神崎郡神河町は、兵庫県のほぼ中央部に位置し、市川上流部に位置する。神河町では2015年度に歴史文化基本構想を策定し、2016年度は保存活用計画の策定に取り組んでいる。その取り組みの一環として、地域に残る主要な古墳についての測量調査をおこない、保存と活用に役立てる計画を立てた。

2016年3月と5月に高畑通古墳群の測量と城山1号墳石室の実測をおこない、また、8月には古城山古墳や高畑通3号墳の踏査、さらに12月に新野地区の分布調査を実施し、新野山根古墳の所在を確認した。それぞれの調査においては、地域の方への聞き取りも併せておこない、高畑通3号墳や荒神山古墳などの所在地についての情報を得ることができた。調査にあたっては、竹国よしみ氏をはじめとする神河町教育委員会のほか、坂田侃氏、中島恒雄氏をはじめとする東柏尾区の皆さん、最明寺井上智博氏、新野区生田良昭氏にたいへんお世話になった。

（菱田）



図1 神河町の位置



図2 神河町所在古墳群の位置（縮尺1/5万）

## 2. 神河町の地理的環境と歴史的環境

### 地理的環境

神河町は兵庫県のほぼ中央に位置する自治体である。北は朝来市、南は市川町、姫路市、東は多可町、西は宍粟市と接し、町域を播磨と但馬を結ぶ JR 播但線・国道 312 号・播但連絡自動車道が縦走する。

ハート状をなす町の面積は 202.27km<sup>2</sup>で、兵庫県の 2.4% を占める。町の約 8 割を山林が占め、千町ヶ峰をはじめ千ヶ峰・暁晴山など 1000 m 級の山々に囲まれている。峰山・砥峰高原は関西地方でも有数の高原地帯となっており、自然志向型の都市住民との交流の場となっている。

平野部には小田原川、市川、越知川などの河川が流れ、「ホタル」や「あまご」などの清流を住み処とする動物などが生息している。聚落はこれら河川沿いに形成され、人口は 11829 人（平成 29 年 1 月現在）、4186 世帯で、以前に比べ減少傾向にある。

産業は町の大部分を占める山林を利用した農林業を中心に発展してきたが、近年では大河内水力発電所や神崎工業団地の開発、宅地開発、特産品開発も進められ、恵まれた自然環境や姫路まで約 40 分、京阪神地域まで約 1 時間 30 分以内という良好な交通アクセスなどを活かした地域振興も進められている。また、近年では映画やドラマのロケ地としての活用など観光事業にも積極的に取り組んでいる。

### 歴史的環境

神河町の歴史は、約 1 万 3 千年前の旧石器時代にまで遡る。福本遺跡からは旧石器時代、縄文時代、弥生時代の遺構、遺物が発見され、古くから人々が活動していたことをうかがわせる。その後の古墳時代には城山古墳群（寺前）や高畑通古墳群（東柏尾）などの古墳が造営され、奈良時代に編纂された『播磨国風土記』には「壱岡里」として登場する。

中世南北朝動乱期には、播磨と但馬を結ぶ交通路上に位置することもあって、赤松氏や山名氏の戦場となり、天正年間には羽柴秀吉軍が播磨攻略の一環として兵を進めている。

江戸時代には当初、姫路藩池田氏の支配下にあったが、寛永 16（1639）年以後、新田・作畑・大畑・岩屋・杉・大山が幕府領となり、他は鳥取藩の飛び地を経て、寛文 3（1663）年、福本藩領となった。そのうち、寛文 6（1666）年には野村が屋形池田領に、貞享 4（1687）年には、吉富・東柏尾・鍛冶屋・大河が吉富池田領となった。

明治 22（1889）年の町村制施行により、神東郡粟賀村（根宇野・山田・中村・粟賀・福本・貝野・寺野・柏尾・東柏尾・加納）・神東郡大山村（吉富・杉・大山・猪篠）、多可郡越知谷村（新田・作畑・大畑・越知・岩屋）、神西郡寺前村（新野・野村・比延・寺前・鍛冶・大河・宇江岩・高朝田・宮野・南小田・上小田）、神西郡長谷村（川上・大川原・本村・赤田・重行・為信・峠・栗・淵）となった。

昭和の大合併によって、昭和 30（1955）年に粟賀村・大山村・越知谷村が合併して神崎町が、寺前村・長谷村が合併して大河内町が成立した。その後、平成 17 年 11 月に神崎町と大河内町が合併して神河町となり、現在に至っている。（井上）

### 3. 高畑通古墳群の調査

#### 古墳群の分布

高畑通古墳群は神河町の南部、大嶽山の東山麓に位置する東柏尾区にあり笠森稲荷神社本殿の北に1号墳と2号墳、2号墳から北に100mほど離れたところに3号墳がある。そばには、桜の名所として知られる「かんざき桜の山桜華園」が立地している。

この古墳群は3基の古墳から構成される古墳時代後期のものである。山裾に2号墳が、2号墳南部の平坦面に1号墳が存在する。1号墳と2号墳の西側を南北に通る道があるが、これは古墳群の南にある向本寺と古墳群の北に位置する薬王子神社をつなぐ里道である。また2号墳の裏手に見られるくぼみは、かつて使用されていた炭焼き窯の跡である。3号墳は長径16m、短径13m、高さ3.2mを測る。墳丘内では石室のような落ち込みのラインが見られ、石室の石と思われるものもみられる。

各古墳の標高は1号墳が標高141m付近、2号墳が標高142m付近に位置する。1号墳と2号墳間は直線距離で約10m離れている。 (寺岡)

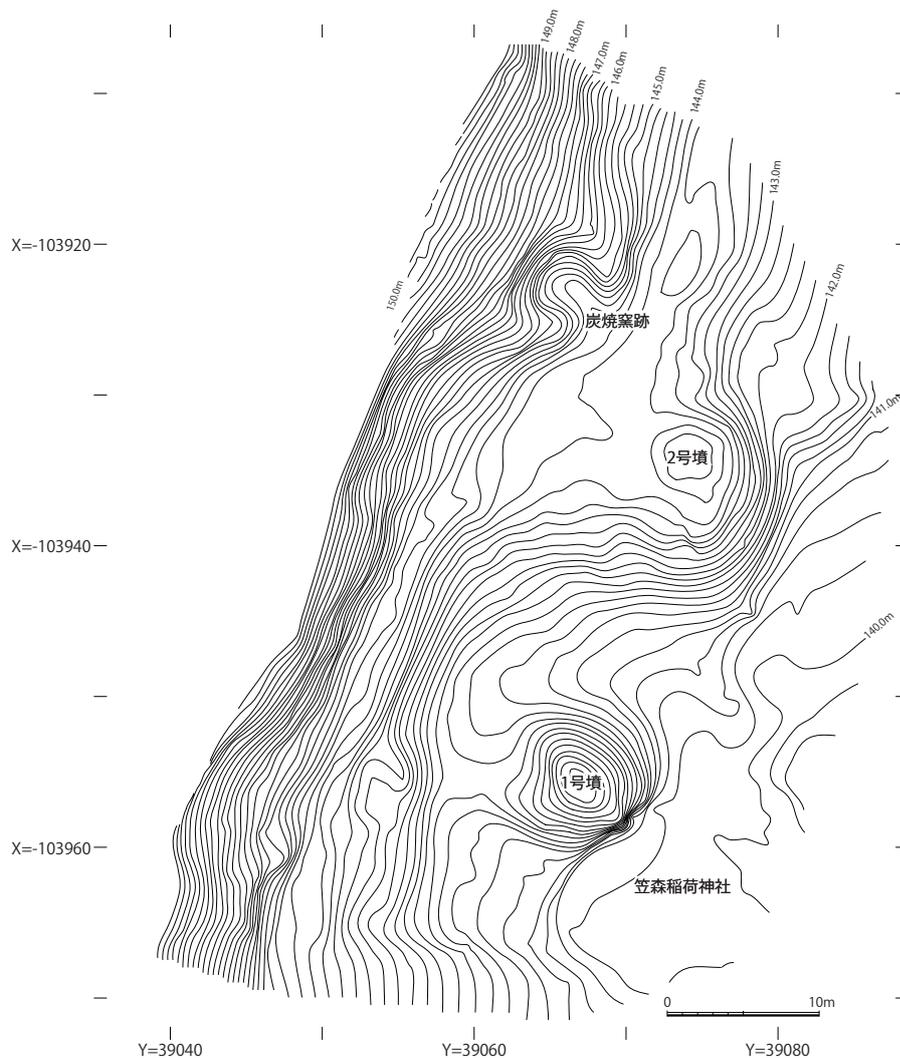


図3 高畑通古墳群墳丘図(縮尺1/500)

## 1号墳

### (1) 墳丘

高畑通1号墳は直径約12m、高さ3.2mの円墳である。埋葬施設は左片袖式の横穴式石室を有する。この古墳は後期の築造と考えられ、後期の円墳に特徴的な墳頂部に平坦面をもたない形状となっている。また、墳丘南側には笠森稻荷神社の社殿が建っており、この社殿築造のためと思われる削平によって、石室の羨道部分がほぼ失われ開口部が露出している。このため、



本来の墳丘形態は社殿側に伸びた楕円形であったと推測される。

墳丘西側には幅約4mの堀切が存在し、北東部に向かって幅を広げながら周溝になっている。墳丘南側は現在桜華園へ至る道路が敷かれているため改変を受けているが、ここまで周溝がめぐっていたと考えられる。墳丘西部斜面には石室天井部にまで到達する穴が開いている。

写真1 1号墳墳丘

(陰地)

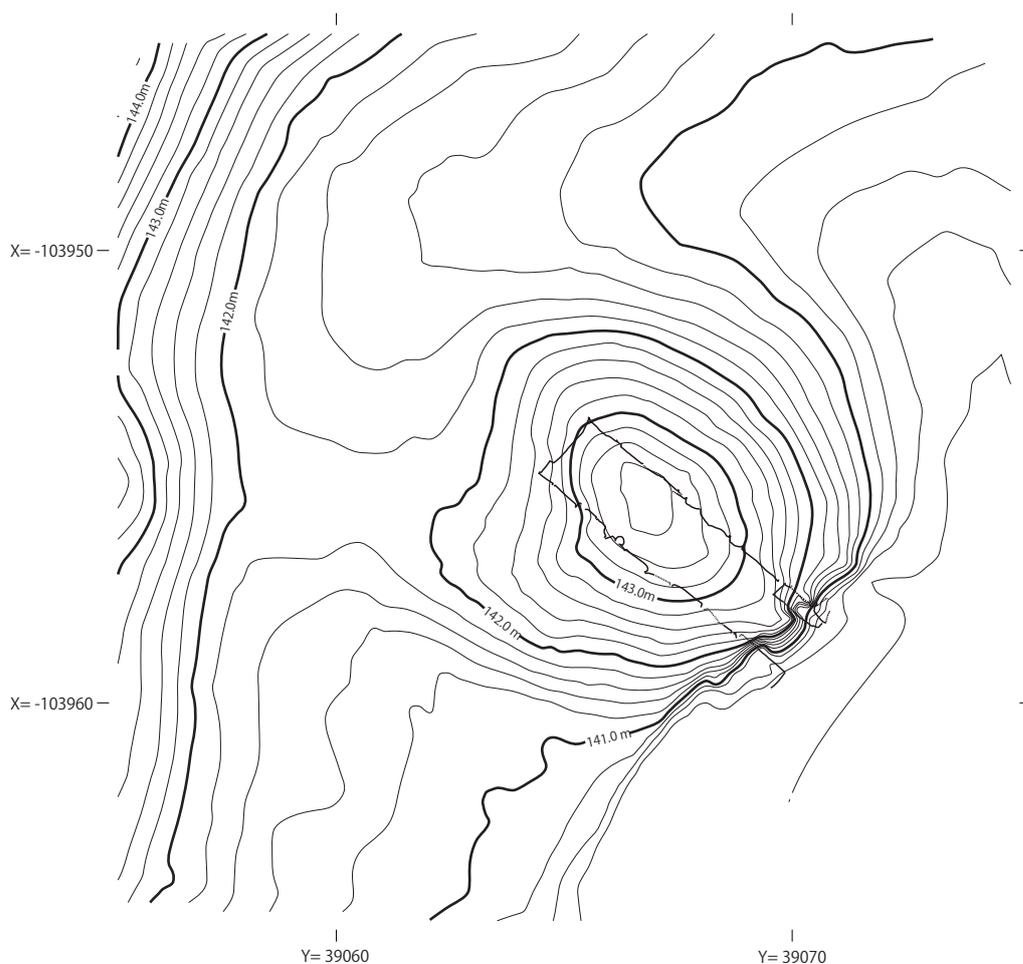


図4 1号墳墳丘図(縮尺1/160)

## (2) 石室

高畑通1号墳の石室は南東方向に開口する左片袖式の横穴式石室で、石室を構成する石には山石が使用されている。主軸は座標北を基準としてN-50°2'-Wの方位をとる。築造年代は、奥壁が一枚石である点や袖の幅が短く大振りの立柱石が用いられている点から6世紀末から7世紀初頭に築造されたと考えられる。残存状況としては、玄室右側壁の羨門部から奥壁へ向かって1.5mほど崩落している箇所があるが、それを除くと玄室はほとんど原状を保っていると推測される。しかし、羨道は笠森稲荷神社社殿によって大きく削平を受け、袖石付近をわずかに残す程度である。現在は、石室内もこの笠森稲荷神社の一部として扱われ、神棚のような小社が置かれている。

玄室は各壁面がおおよそ直線的で、胴張りは認められない。玄室長は5.5m、玄室幅は奥壁側断面部で1.6m、玄門部付近で1.5mを測り、玄室の高さは床面が表土に覆われているため不明であるが、表土から奥壁付近天井石下面までの高さは1.4mとなる。玄門部幅は1.1mで、袖の幅が0.4mを測る。羨道は、現況の羨道長が1.3m、羨道幅が1.1mを測り、羨道高は玄室と同様に不明であるが、表土から天井石下面までの高さは最も低いところで1.2mとなる。

天井石は玄室に4枚架構されているが、羨道側の1枚は玄門部を越えて羨道と共有し、羨道側が低くなるように傾斜している。この傾きは右側壁の崩落によって引き起こされた可能性もあるが、左側壁壁面に大きな欠落や孕みは確認されないため、築造当初より傾いていた可能性も否定できない。羨道の天井石は玄室と共有する一枚以外残存しない。奥壁は山型の一枚石で下から約4分の3を占め、その左右と上部は比較的小型の石が積まれており、この部分には持ち送り技法が確認される。袖石は1枚の立柱石からなり、L字状を呈している。表土からの高さが1.5m、幅は1.4mを測り、くびれ部の高さは0.2mで、幅は1.0mを測る。側壁は、現床面から数えて2段目（標高141.6m付近）を境に用いられる石材の大きさが変わる点で特徴がみられる。この高さ以下では比較的大きめの石が使用され、ある程度目地が通るが、それ以上では比較的小さめの石が使用され、目地が不鮮明になっている。（新尺）



写真2 1号墳石室内部



写真3 開口部と笠森稲荷神社社殿



写真4 石室実測風景

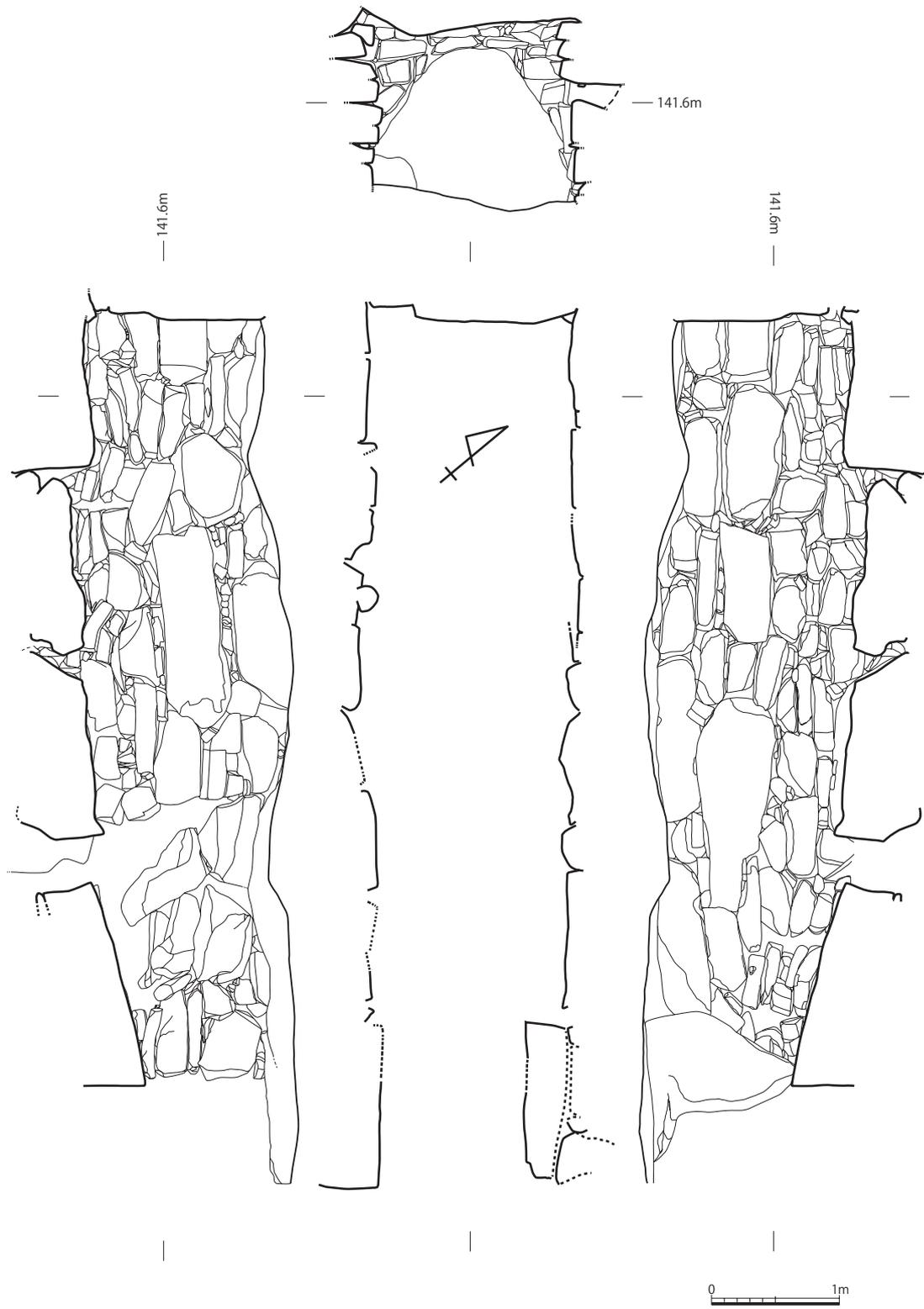


图5 高畑通1号墳石室実測図(縮尺1/50)

## 2号墳

高畑通2号墳は短径約15m、長径約17m、高さ約3mの楕円形の円墳である。南北方向に長径をのびして築造されている。墳丘は北部や東部に比べて南部に長く伸びている。2号墳も1号墳と同じく頂部に平坦面を持たない形状であり、1号墳同様古墳時代後期の築造と考えられる。墳丘盛土の流失によって、南斜面に石室石材の一部が露出している箇所がある。墳丘の西側は山の斜面に接続し、その間を里道が通っている。この点において1号墳とは大きく異なる。ここを除く東側から南側にかけての墳丘裾に、1号墳と比べてわずかではあるが周溝状のくぼみが確認できる。 (陰地)



写真5 2号墳墳丘



写真6 2号墳露出石材

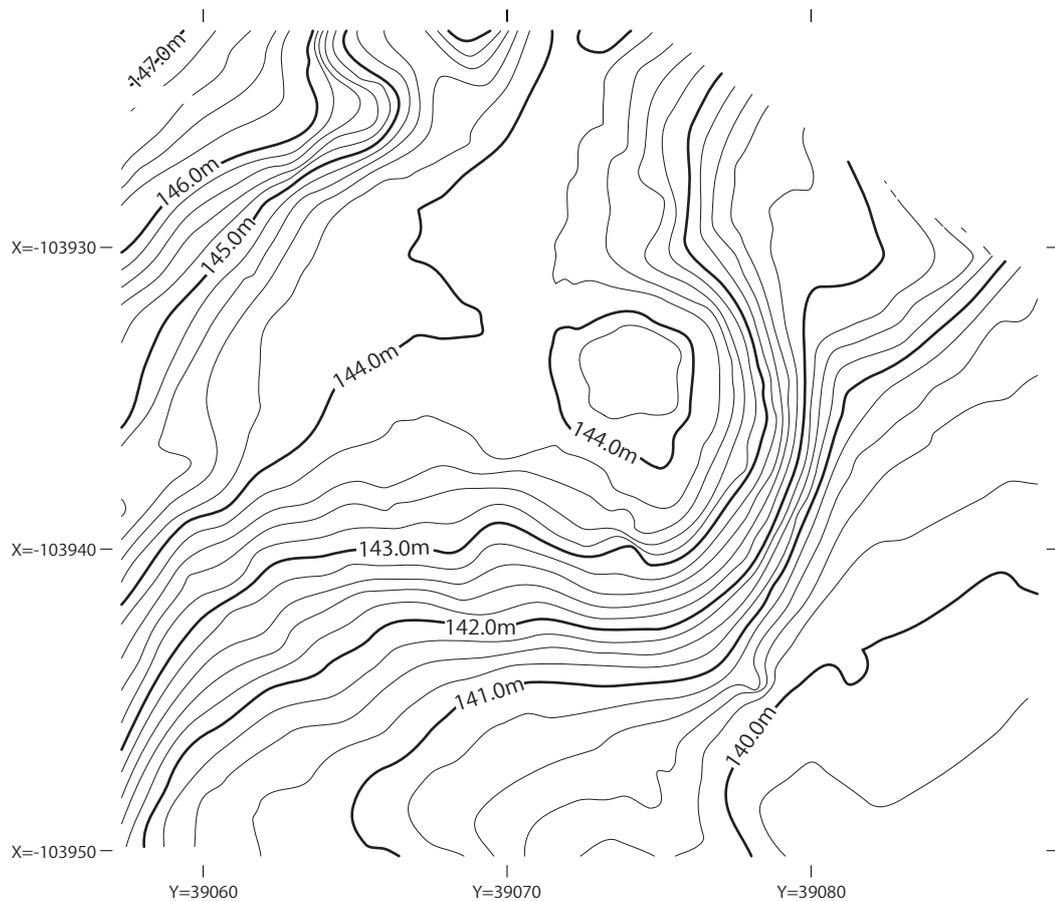


図6 2号墳墳丘図(縮尺1/250)

#### 4. 神河町東柏尾区における聞き取り調査

平成 28 年 3 月 28 日、神河町東柏尾地区に所在する高畑通古墳群において当該区の文化遺産に関する聞き取り調査をおこなった。調査者は陰地祐輝、土田雄大、寺岡潤一郎、近藤史昭、縄手晴日、菱田哲郎、井上直樹の 6 名である。そして、本調査では、木村謙三氏（昭和 23 年生）、坂田侃氏（昭和 22 年生）、坂田英己氏（昭和 33 年生）、中島恒雄氏（昭和 22 年生）、馬場紀雄氏（昭和 15 年生）、山名賢二氏（大正 13 年生）の 6 名を対象として聞き取りをおこなった。

##### 地域の人々にとっての高畑通古墳群

80 年ほど前までは 1 号墳の石室は、笠森稲荷神社に関連するものだと考えられていた。1 号墳が古墳であることがわかると、2 号墳も古墳として認知されるようになっていった。中島氏が子供だった頃（60 年ほど前か）には、2 号墳を古墳だと認識していたようだ。1 号墳は地域の子供たちの遊び場でもあり、石室に入って遊ぶこともあったという。石室内には狐の置物などがおかれ、稲荷神を祀る祠としても利用されていた。聞き取り対象者の幼少期には、石室の右側壁にみられる大規模な崩落は起こっておらず、崩落が起こった正確な時期は不明である。3 号墳については、かつてこの地を訪れた研究者によって、その存在が指摘されていたようだ。

65 年ほど前までは、2 号墳北西側に炭焼き窯が存在しており、そこでクヌギなどの炭焼きがおこなわれていたという。1960 年代頃になるとスギやヒノキを利用する林業が活発になり、炭焼きはおこなわれなくなった。

また、聞き取り調査によって、荒神山古墳の位置も明らかになった。馬場・山名両氏の案内のもとに古墳の踏査をおこなったが、古墳の所在地にはその石材とみられる石が残るのみであった。墳丘は「かんざき桜の山桜華園」の整備にともない、削平されたという。

##### 地域の民俗行事

高畑通古墳群には、笠森稲荷神社が隣接する。この神社は稲荷神を祀っており、地域では吹き出物が治るご利益があるといわれている。毎年 2 月末頃には「おこもり」と呼ばれる行事がおこなわれる。1 号墳東側の平坦地に少年たちが集まり、2 名の大人の監督のもと、共に一晩を過ごしたという。一度は廃れてしまったが、近年になり形を変えて再びおこなわれるようになった。

また、初夏には松明を持って大山から吉富、東柏尾を歩く「虫送り」も地域の重要な行事である。以前は、松の松明を持って田から虫を追いだす行事であったが、ヘリコプターによる薬剤散布がおこなわれるようになると衰退したという。平成になって再開されたが、行事の目的は年配者と子供の交流へと変化しているそうだ。また、松明を使わない形へと変化している。

##### 聞き取り調査を終えて

聞き取り調査をとおして、高畑古墳群が信仰の場や遊びの場、生業の場として地域の人々に



写真 7 笠森稲荷神社社殿

よって様々な形で利用されてきたことがうかがえる。一方で、荒神山古墳のように破壊をこうむった古墳も存在したようだ。東柏尾地区において、「おこもり」や「虫送り」などの民俗行事が一度は廃れるが、近年になり再び注目を浴びたことも興味深い。地域住民同士のコミュニケーションの場として、これらの民俗行事が、再び見直されたことがわかった。

（川崎・近藤）

追記

調査の後、山名賢二氏がお亡くなりになったとうかがいました。山名氏には、東柏尾の歴史についてたくさんのお話を聞かせていただきました。謹んでお悔やみ申し上げます。



写真8 聞き取り調査風景



写真9 荒神山古墳跡から南東を望む  
散乱する石は古墳の石材か

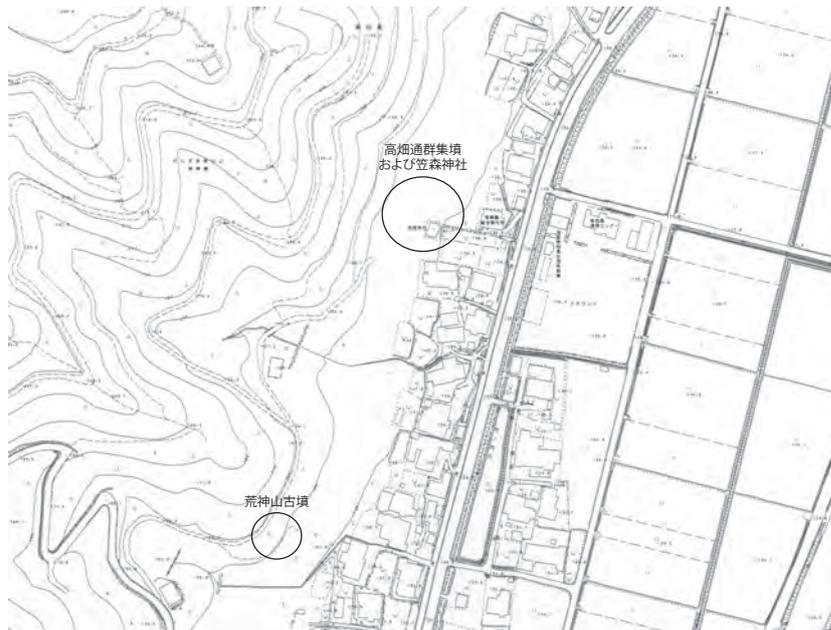


図7 高畑通群集墳と荒神山古墳の位置関係（縮尺 1/5000）

## 5. 城山1号墳石室の調査

京都府立大学文学部考古学研究室では2015年3月と9月に寺前所在の城山古墳群の測量調査を実施し、墳丘の分布と地形状況を報告した(京都府立大学文学部考古学研究室2016)。それに引き続き、2016年3月に城山1号墳の横穴式石室に対する実測図を作成した。本章では前年度の成果を踏まえながら、城山1号墳の石室について新たに得られた成果を報告する。

城山古墳群は4基の古墳からなる古墳時代後期のものである。そのなかで1号墳はもっとも標高の高いところに位置し、墳丘と石室はほぼ築造当時のまま残存している。2号墳の石室は残存部が少ないながら無袖と考えられ、さらに1号墳に比べ小さな石を使用し多段に組まれていることから、1号墳より古いと考えられる。3・4号墳は周溝を共有していることからほぼ同時期の築造とみられるが、4号墳の石室を見ると側壁に使用された石は小さく、持ち送りが顕著であり、玄室の前壁が高いことから、両古墳は4基のなかでは早期のものと思われる。したがって城山1号墳は4基のなかではもっとも新しく築造されたと捉えることができる。

1号墳の墳形は楕円形を呈する墳形で、高さ約4m、長軸約13m、短軸約8mを測る。墳丘の周囲には周溝がみられ、その幅は約1.5mである。墳丘の東側は大きくくぼんだ周溝となっており、墳丘土を採った跡と推測される(京都府立大学文学部考古学研究室2016)。

石室は南方向に開口する無袖式の横穴式石室で、座標北を基準として $N-9^{\circ}8'-W$ の方



写真10 1号墳墳丘正面



写真11 1号墳石室奥

位をとる。石室の規模は全長8mである。右側壁の南端に並ぶ一石は築造当初の位置にないとみられる。右側壁の開口部付近は落石の跡もみられることから、これは天井付近からの落石と考えられる。玄室の幅は奥壁床面で1.3m、奥壁から3.9m付近の最も幅の広い地点で1.7mを測る。奥壁から4~8mでは両側壁とも東へ湾曲しながら羨道が続く。とくに右側壁で顕著に湾曲しているが、側壁の孕みによるものとみられ、基底部では直線的であると推測される。開口幅は、表土面で1mを測る。

床面は石室内への流入土に厚く覆われているため、現状では築造当初の寸法を知ることができないが、現在露出している部分では奥壁幅1.2m、奥壁高1.62mを測る。また、開口部の幅は最も狭まる付近で0.5mを測るが、西側壁が孕んでいることを考えると当初は0.9mほどであったと推測される。奥壁から2m付近までは表土が薄く、基底部の石が見えているものと思われる。これは、かつておこなわれた発掘によるものではないかと推測する。

奥壁は、2枚の石で構成されており、天井付近に小さな石を充填し隙間を埋めている。両側壁とも、奥壁に近い基底部分には比較的大きな石を使用している。奥壁から2.5m付近までは0.8～0.9m大の石を、左側壁では4段、右側壁では3段積む。両側壁とも標高214m付近で目地が比較的良好に通っている。開口部に近づくにつれ小さな石を用いるようになるが、基底部分ではその限りでないかもしれない。また、左側壁をみると、とくに奥壁から4m付近までは丁寧に石の面が揃えられているため、ほぼ垂直に立っているような印象を受ける。右側壁では3m付近から3・4段目の石がせり出し持ち送りのような状態となっているが、石の面が垂直に整えられているところをみると、築造当初は左側壁と同様に垂直に近い壁面を形成していた可能性がある。4m付近から開口部にかけては両側壁ともに孕みが確認され、とくに右側壁でそれが顕著にみられる。天井石は奥壁から開口部まで約1m幅の石8枚を使用しており、開口部に向かってわずかに傾斜をもつ。（大平）

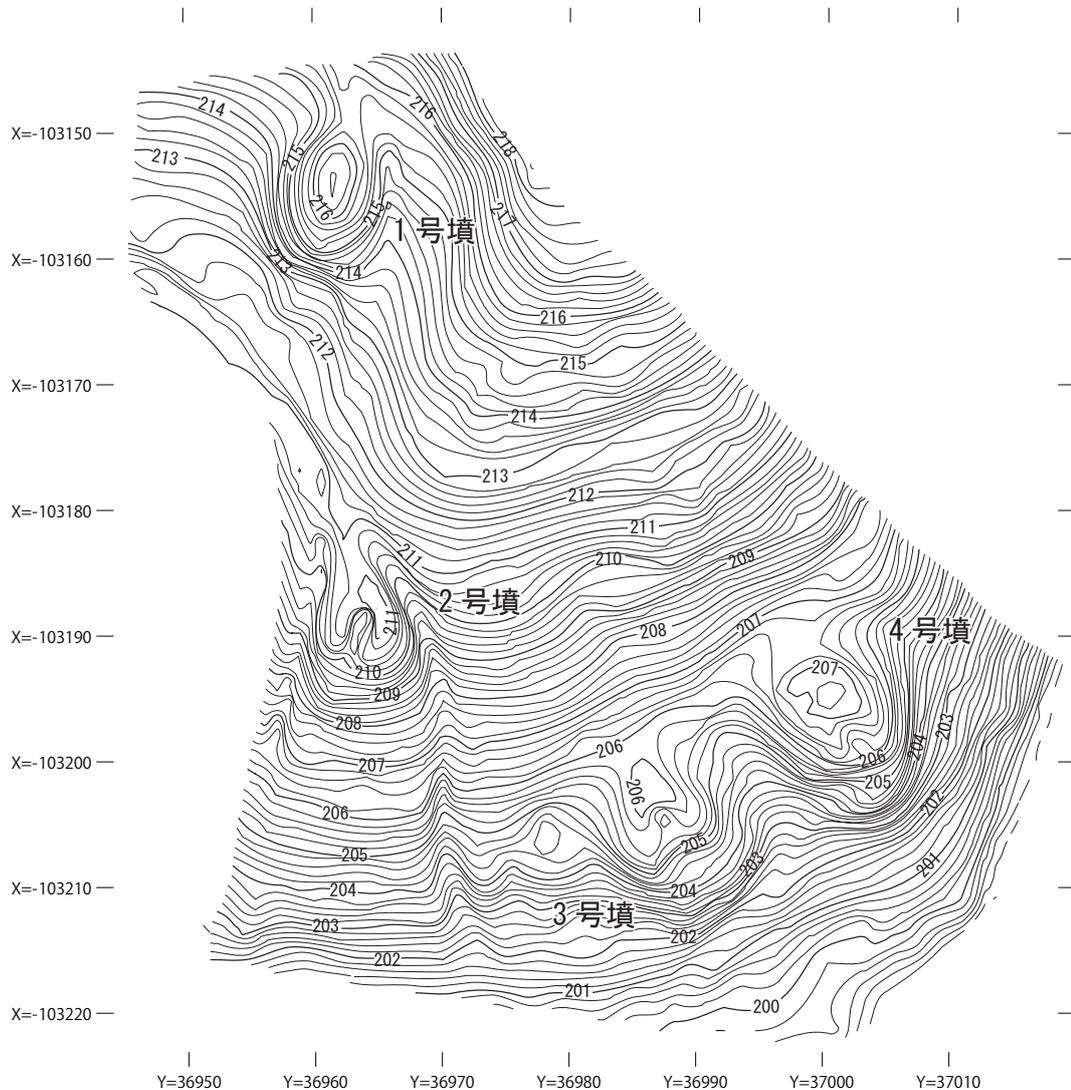


図8 城山古墳群分布図（縮尺 1/600）

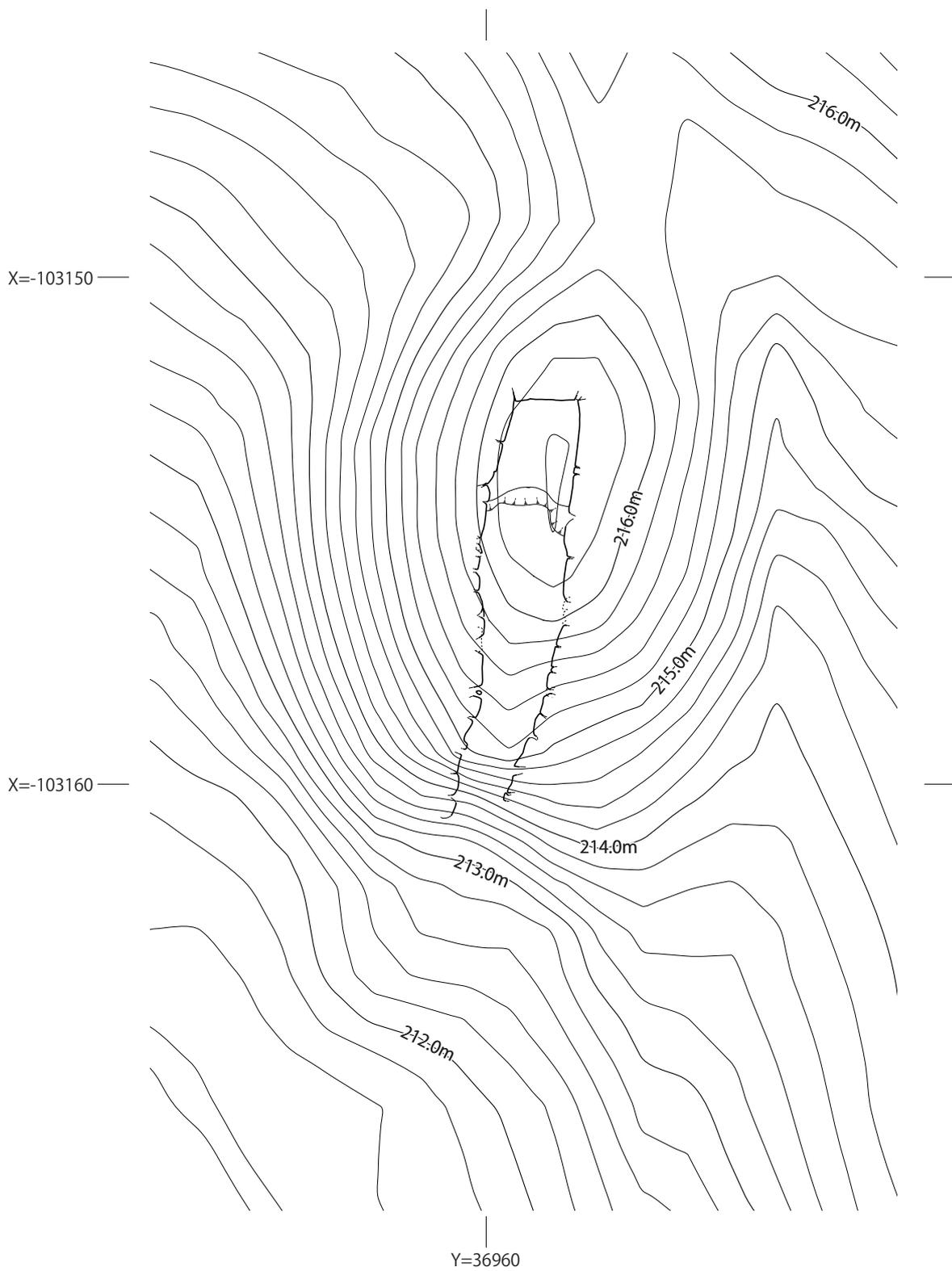


图9 1号墳填丘図(縮尺 1/120)

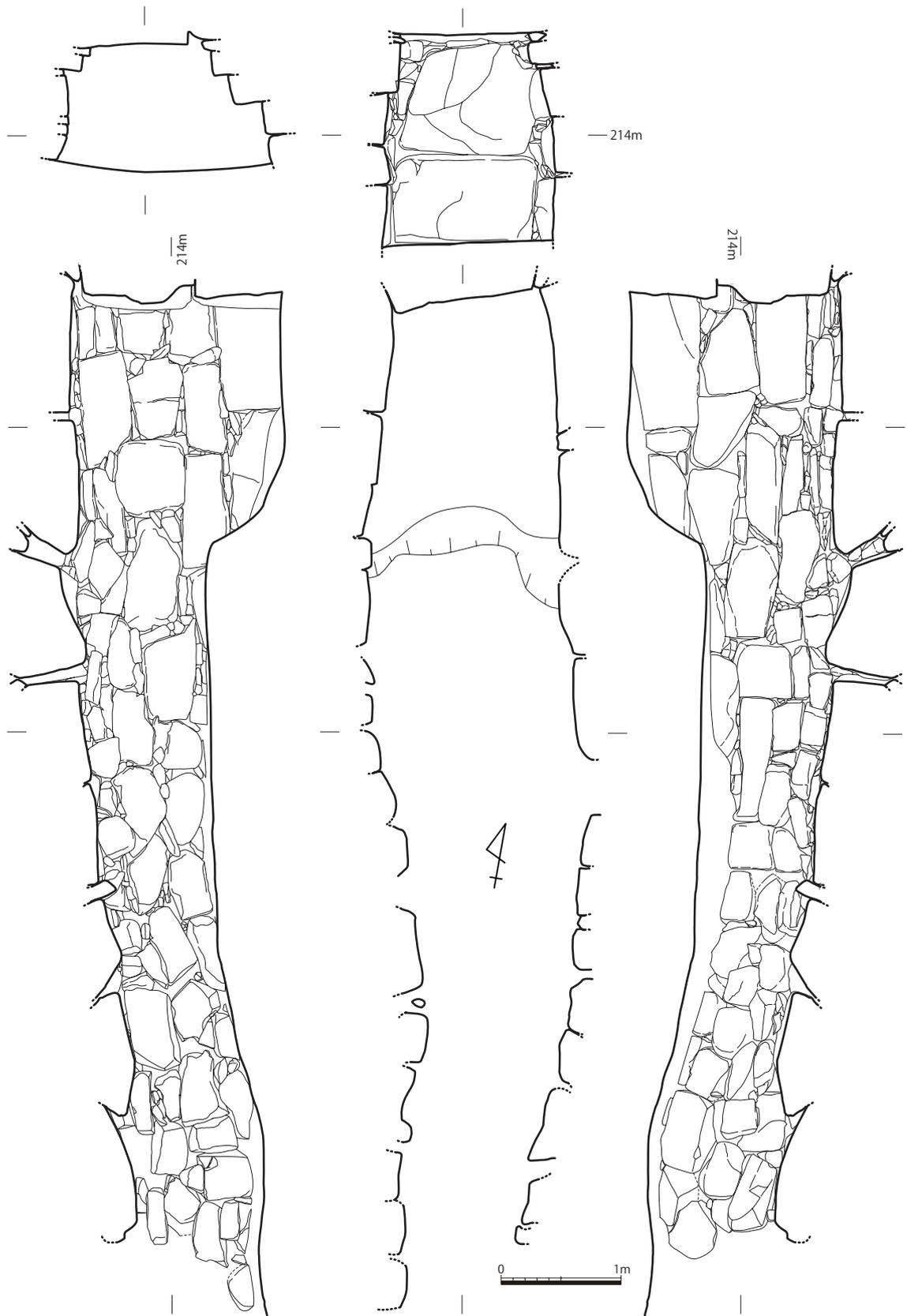


図10 城山1号墳石室実測図（縮尺 1/50）

## 6. 新野分布調査

### 調査の目的と概要

本章では、平成 28 年（2016）12 月 23・24 日に実施した、兵庫県神崎郡神河町新野地区における踏査および聞き取り調査について報告する。新野地区には、古墳をはじめさまざまな文化財が所在する地域である。しかし、『兵庫県遺跡地図』や『おおかわち』（町誌）の中では、それらの文化財のいくつかが消滅したと記載されている（兵庫県教委 2004, 大河内町教委 1996）。今回は、それらの文化財の有無および位置を確認するための調査である。

### 聞き取り調査

踏査前に新野地区について、前区長で新野地区在住の郷土史家である生田良昭氏に聞き取り調査をおこなった。

まず、周辺の状況についてお話をうかがった。隣保は新野・岡崎・西脇の 3 地区がそれぞれ上戸・下戸に分かれ、六つの最寄を構成する。新野地区の字については、熊野神社周辺が山根、熊野神社西南一帯が惣林、熊野神社北側墓地周辺一帯が北野に当たる。

熊野神社は、新野地区の氏神であり、地区全域が氏子となる。拝殿には、絵馬や大人用屋台の一部が奉納されている。玉垣は、昭和 30 年代に整備され、その際に以前からあった堀を再整備し、拝殿南東側に池が造営された。また、この池には昭和 55 年（1980）に、熊野神社東側の水路から移築された橋が掛かっており、橋桁側面には「昭和 55 年 7 月 22 日」と記載された銘板が付されている。一方、拝殿北側の林には、砂防を目的とした池も造営されており、これは生田氏が幼少期から存在しているそうだ。熊野神社における祭りは、毎年 5 月 5 日と 10 月の体育の日の前日におこなっている。祭礼の祝詞に際しては、比延区に所在する日吉神社神職を招聘し、祝詞をあげていただく。神輿は各地区にあり、以前は新野・岡崎地区においては、建具屋を中心に子供なども手伝い、神輿を作製、使用していた。

また、熊野神社東側には観音堂が存在する。この観音堂では、もともと新野地区の伊勢講や祭礼がおこなわれた。この他、地域の行事としては、御所谷宝篋印塔で毎年 12 月に、新野庄を訪れた親王を慰めるための祭りが催されている。これらの行事は、現在は形を変えておこなわれている。伊勢講を例にとると、新野上戸では成人式前後に飲食店を予約し、男女混合で食事を取る。一方、新野下戸では、集会所に年 3 回集まっているとのことだ。

さらに新野地区には、昭和 40 年ごろの水車が 18 基存在し、水車が地区のシンボルであった。だが、減反政策の影響などで現在では 3 基まで減少している。こういった状況から新たな行事として、平成 20 年（2008）から毎年 5 月と 11 月の末に水車祭りをおこなっている。観音堂の近くには、3 体の地蔵が安置された覆屋が所在する。この地蔵は、もともと墓地東側の新野・岡崎地区の境界に所在した地蔵堂に安置されていたものである。

以上のように、生田氏への聞き取り調査では新野地区の詳細な状況が判明した。これらの情報を前提として新野地区の踏査をおこなった。

### 新野地区踏査

先に述べたように、今回の踏査は新野地区における文化財の残存状況の確認調査を兼ねている。まず、遺跡地図などから、調査地の現状を整理しておく。新野地区においては、熊野神社

周辺に弥生時代および古墳時代の2遺跡、6基の古墳、1基の経塚が確認されている。この中で弥生時代である清水山遺跡、円墳である清水山1～5号墳、御所谷経塚の7ヶ所が消滅したになっている（兵庫県教委2004、大河内町教委1996）。このような調査地の状況を踏まえて、踏査をおこなった。なお、図11に聞き取り調査および踏査の成果を反映した地図を作製した。

まず、消滅したとされる遺跡および古墳の確認調査について記述する。清水山遺跡は清水山中腹に位置する。清水山は麓まで、住宅地が進行してきているものの、丘陵自体は未だ開発されていない。踏査では遺物を見つけることが出来なかったため、遺跡の実態は不明瞭ではあるが、完全には消滅していないものと考えられる。清水山1～5号墳については、明確な場所を比定するまでに至らなかった。ただ、大日堂の裏手で古墳状隆起が確認された。この隆起が清水山古墳群の1基である可能性がある。また、墓地の南側では近世埋葬が2基確認された。若干隆起し、中央部がくぼむ形状から古墳として認識された可能性は否めない。また、御所谷経塚は、おそらく御所谷宝篋印塔のことを指すと考えられる。踏査では、確認することができなかったが、生田氏のお話にも登場し、付近の住民もその存在を示唆しており、消滅していない。また、丸山東側には上月氏碑が建立されている区画が存在する。おそらくこの区画、もしくは隣接地に旧地藏堂が存在したものと考えられる。

遺跡地図では、新野山根古墳は熊野神社東側の住宅地の一角に所在する古墳として記載されている。しかし、当該地に古墳は確認できなかった。おそらく遺跡地図作製時の位置の表示間違いであると考えられ、新野山根古墳の本来の位置は図11に示した位置である。

次に、今回明らかになった遺物散布地の状況を概観する。今回、遺物散布地として確認したのは4ヶ所である。まず、熊野神社北西側の散布地では、須恵器および中世土器を多数表採した。どれも小片で図化に耐えるものではないが、おもに須恵器や須恵器系陶器である。熊野神社北東側の散布地では、東播系須恵器碗の口縁部片と播鉢、もしくは壺の口縁部と考えられる小片を表採した。また、駅前から東側の住宅地まで広がる圃場整備に伴う耕作地ではまったく遺物を見つけることができなかった。圃場整備の際に削平・盛土がおこなわれ、遺跡が消滅している可能性が想定される。

ここからは踏査で表採した遺物とかつて新野地区から表採されたと考えられる遺物について記述する（図12）。

1は、熊野神社北側墓地の東側で表採した弥生土器器台の体部小片である。外面に、はっきりとした太めの凹線文を施す。内面は激しく摩滅しており、詳細な調整は不明である。胎土は荒く、焼成は不良である。西播磨IV様式の弥生土器と考える（大手前大史研2007）。

2は、北野遺跡で表採した須恵器杯蓋である。口径12.0cm、器高4.8cmの完形品である。粘土紐を時計回りに巻いて成形している。内面および外面下半は回転ナデを、外面上半はケズリを施す。胎土は密で、焼成は良好である。6世紀前半の遺物と考えられる。3は、新野地区から表採された須恵器高杯である。口径11.8cm、残存高7.6cm、底径11.0cmで、70%ほど残存する。杯部は、内面および外面上半は回転ナデを、外面下半はケズリを施す。脚部は杯に貼り付けており、外面は回転ナデを、内面は指ナデを施す。スカシは穿たれていない。胎土は密で、焼成は良好である。6世紀末から7世紀初頭の遺物と考えられる。

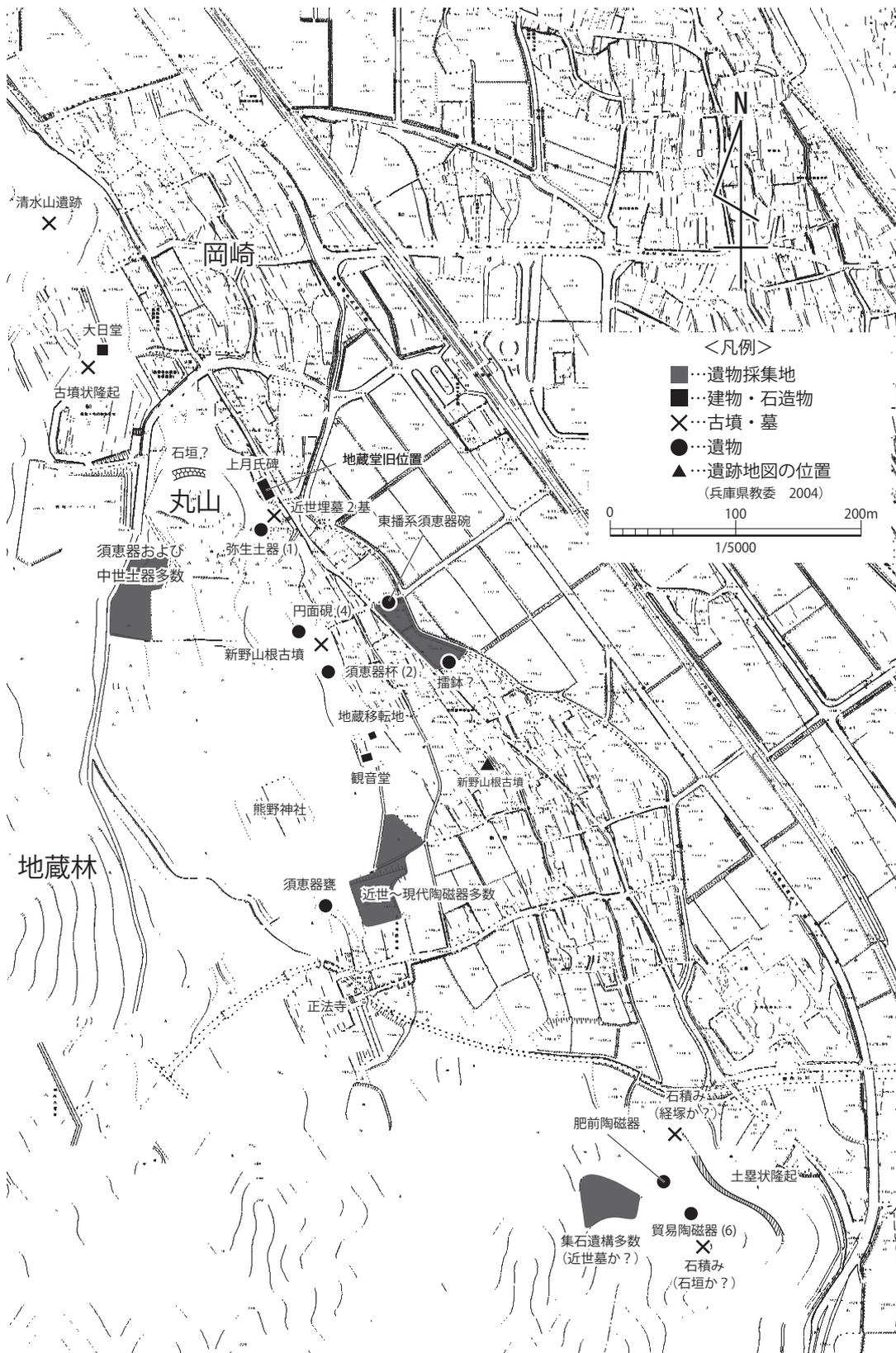


図 11 新野地区聞き取り調査および踏査の成果 (縮尺 1/5000)

※遺物横の番号は図 12 の図面番号に対応



写真 12 新野山根古墳での聞き取り調査の様子



写真 13 踏査の様子



写真 14 墓地西側から見た丸山



写真 15 円面碇

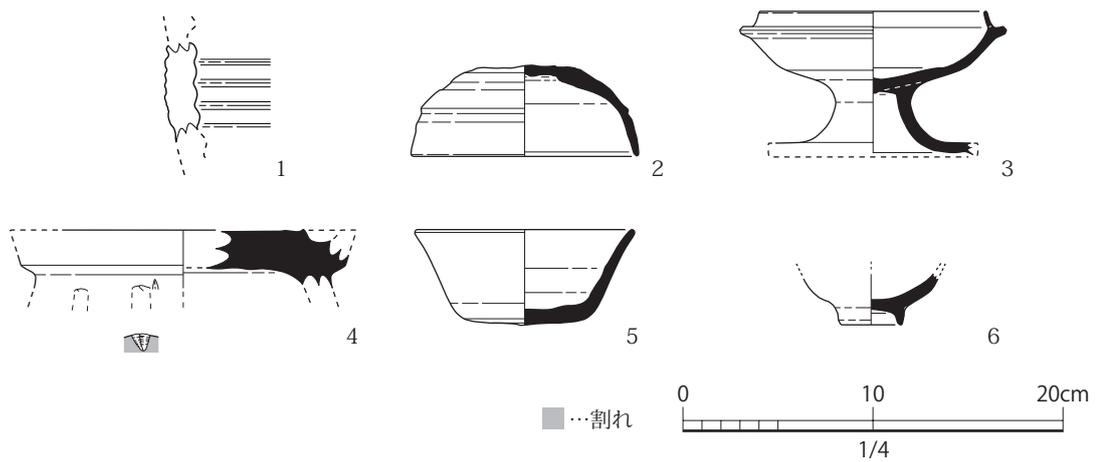


図 12 新野地区表採遺物（縮尺 1/4）

- 1：熊野神社北側墓地東側 2：北野遺跡（新野山根古墳の南側） 3：伝新野地区  
4：北野遺跡 5：北野遺跡 6：御所谷宝篋印塔

4は、北野遺跡で表採した陶製円面硯である。最大径18.0cm、残存高3.1cmで、30%ほど残存する。ロクロ形成であり、外面は回転ナデを施す。内面は、ユビオサエの後、ナデを施す。脚台部は残存率が悪く、詳細は不明であるが、筆者の復元では長方形のスカシが10ヶ所前後に穿たれたと考える。スカシは、浅いU字形の彫刻刀のような工具で、外面から穿っていると想定される。中央のスカシの右側には、工具の当たり痕と考えられる痕跡がある。また、硯面部は非常によく使い込まれており、陸がツルツルに摩耗している。陸と海を分けるように強いナデで沈線を形成する。海は比較的浅い。胎土は密で、焼成は良好である。7世紀後半から8世紀前半と考えられる。5は、新野山根古墳から表採された須恵器杯G、もしくは碗Aである。口径11.3cm、器高5.1cm、底径6.4cmで、40%ほどが残存する。内外面は回転ナデが施され、ロクロ成形である。底部は、3回転以上のヘラ切りである。胎土は密で、焼成は良好である。おそらく円面硯と同時代の遺物であると考えられる。

6は、御所谷宝篋印塔が所在する尾根の中腹で表採した貿易陶磁器である。明代の青磁碗と考えられる。蓮弁文などはみられず、無文である。

以上のように、踏査の成果と表採した遺物について記述した。

#### 遺跡からみた新野地区の歴史

本節では、聞き取り調査および踏査の成果を総合して、新野地区について若干ではあるが考察を加える。

まずは、弥生土器の表採場所から周辺の状態を考えていく。弥生土器は丸山と呼称される独立丘陵の東側で土層に突き刺さった状態で発見された。墓地付近の土が客土の可能性も考慮に入れなければならないが、遺物の表採地点は、丸山の斜面上であり、弥生土器は丸山側から落下してきた可能性が高い。また、丸山最上部は平場になっており、人為的に削平した可能性がある。以上を考慮すると、丸山上部に弥生時代の遺跡が所在する可能性が高い。

次に、新野山根古墳および北野遺跡について考えていく。踏査によって、北野遺跡は古墳時代から飛鳥時代までの遺跡であることが判明した。また、北野遺跡の東西に存在する遺物散布地が北野遺跡に付随するものであれば、中世まで継続している可能性もある。古墳が所在する尾根の南側では古墳時代の遺物を、尾根の北側では飛鳥時代の遺物を表採している。大胆に考察を加えれば、古墳時代における北野遺跡は、尾根の南側、すなわち熊野神社東側一帯に分布する集落であり、徐々に尾根の北側、すなわち熊野神社北側一帯へと集落が遷移していった可能性が考えられる。また、これまで神河町では、飛鳥・奈良時代の瓦生産をおこなった福本遺跡から転用硯が出土するに留まっている。転用硯は、識字層に広く普及した硯である。今回、表採した円面硯は、最大径が大きく、硯面部も厚手で、立派な製品である印象を受ける。陸が摩耗し、使い込まれていることから、実際に使用したと想定される。官衙などの役所の存在を含め、新野地区に飛鳥・奈良時代に識字層がいたことを示している。今後、調査が進展し、北野遺跡の集落形態や状況が判明すれば、瓦生産をおこなった福本遺跡などとの関連から、神河町における飛鳥・奈良時代の状況、すなわち『風土記』に登場する「聖岡里」の状況が見えてくると考える。

#### まとめ

今回の調査では、これまで本格的な分布調査をおこなっていなかった新野地区において、さ

まざまな状況と文化財の所在を確認できた。従来、消滅したと考えられていた遺跡や古墳も、全ては消滅しておらず、存在が確認できたものもある。遺物についても、少量ではあるが、その片鱗をのぞかせる発見もできた。今後は、継続して調査をおこない、新野地区の往時の状況をさらに解明していきたい。（岩元）

## 7. 調査のまとめ

2015年に調査を開始した城山古墳群につづき、2016年は高畑通古墳群の測量調査と周辺の分布調査を実施した。東柏尾に所在する高畑通古墳群は、1号墳の石室が羨道部をのぞいて良好な状態で残存することから、城山古墳群とならび、神河町を代表する古墳時代後期の古墳群とされてきた。両古墳群は墳丘・石室の規模や築造時期がちかく、城山古墳群が現在の寺前をはじめとする市川右岸地域の首長を葬った墓地であるとすれば、高畑通古墳群は現在の東柏尾・柏尾を中心に市川と猪篠川にはさまれた地域の有力者の墓地ということができよう。

これらの造営時期について、石材の大きさや構築方法からみると、高畑通1号墳の石室は下半を大型の石で構築しながら上半は小型の石を多用しており、大型の石を中心に構築した城山1号墳の横穴式石室にくらべて相対的にふるく、城山古墳群でも初期に造営された4号墳と類似する。ただ、城山4号墳は側壁の持ち送りが顕著で玄室前壁が高くつくられていたのに対し、高畑通1号墳の石室はこれらの特徴がわずかにみとめられる程度であり、石室の形態変化の順序からいえば、城山4号墳と1号墳との間に高畑通1号墳を置くことができる。

一方、両古墳群の石室構造には若干の差異があり、高畑通1号墳が片袖の横穴式石室であるのに対し、城山1号墳は無袖の横穴式石室をもつ。播磨の後期古墳にみる大型横穴式石室は、前者のように袖を形成するものが多く、後者のような無袖の石室は近畿地方北部の影響を受けて成立したと推定される（京都府立大学文学部考古学研究室2016）。城山古墳群と高畑通古墳群の調査成果にもとづけば、市川流域においては6世紀後葉から7世紀前半のある時期に無袖横穴式石室が出現したと考えられるものの、その地域的、時期的なひろがりや位置づけについては、さらなる調査の蓄積と検討が必要である。

今回の調査では、聞き取りと踏査によって東柏尾の荒神山古墳と新野の山根古墳の位置を特定することができた。高畑通1号墳のように地域のなかで大切に継承されてきた文化遺産もある一方で、近代の開発によってすでに失われた古墳も少なくない。現存する古墳の考古学的な調査が必要なのはもちろんのこと、時間の経過とともに失われつつある地域の記憶を記録して伝えていく作業が、今後さらに重要となるであろう。（向井）

### 【参考文献】

- 大河内町教育委員会編 1996 『おおかわち』  
 大手前大学史学研究所編 2007 『弥生土器集成と編年 - 播磨編 -』 大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター研究報告5  
 京都府立大学文学部考古学研究室2016 「神河町城山古墳群の測量調査」 『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』 第2号  
 兵庫県教育委員会編 2004 『兵庫県遺跡地図』



表1 市川・加古川流域の大型無袖石室一覧

No.	名称	所在地	旧郡名	石室					築造時期	備考
				現存長 (m)	奥壁幅 (m)	奥壁高 (m)	奥壁 基底石	前壁		
1	見野6号墳東石室	姫路市	飾磨郡	9.5	1.6	(1.8)	1石	有?	TK43	I a
2	見野6号墳西石室	姫路市	飾磨郡	8.5	1.5	(2.05)	1石	有	TK43	I a
3	見野7号墳	姫路市	飾磨郡	(8.0)	1.75	(1.6)	1石	有?	TK217～	I a
4	火山2号墳	姫路市	飾磨郡	9.0	1.7	(1.9)	1石	不明	TK209	I ?
5	火山3号墳	姫路市	飾磨郡	8.0	1.6	(1.6)	1石	有	TK217～	I a
6	東広畑古墳	福崎町	神前郡	10.0	1.6	(2.24)	1石	有	TK209	I a
7	神谷古墳	福崎町	神前郡	11.0	1.32	不明	1石?	有	TK217	I a
8	朝谷1号墳	福崎町	神前郡	8.2	2.13	1.8	1石	無	TK209～217	I b
9	大谷古墳	市川町	神前郡	6.8	1.4	1.6	1石	不明	TK46～	I ?
10	城山1号墳	神河町	神前郡	8	1.2	1.62	1石	無	TK217	I b
11	窟屋1号墳	三木市	美嚢郡	10.85	1.6	不明	2石	不明	TK43	II ?
12	新池1号墳	加西市	賀毛郡	8.4	1.45	不明	不明	有	TK217	? a
13	吉馬櫃坂A-1号墳	加東市	賀毛郡	7.4	1.55	不明	1石	不明	TK217	I ?
14	上三草古墳群牧場内古墳	加東市	賀毛郡	8.8	1.15	(1.8)	3石～	無	TK43～	II b
15	四ツ辻5号墳	加東市	賀毛郡	7.4	1.65	不明	1石	不明	TK209	I ?
16	秋津9号墳	加東市	賀毛郡	(9.0)	1.7	2.5	1石	不明	TK217	I ?
17	秋津11号墳	加東市	賀毛郡	8.4	1.7	(2.1)	1石	無	TK217	I b
18	寺内7号墳	西脇市	託賀郡	8.5	1.7	2.2	1石	不明	TK217	I ?
20	東山11号墳	多可町	託賀郡	9.9	1.5	2.0	1石	不明	TK217～	I ?
19	東山12号墳	多可町	託賀郡	11.1	1.95	2.55	3石	無	TK217	II b
21	安楽田1号墳	多可町	託賀郡	(8.0)	(1.35)	(1.8)	1石?	無	TK217～	I b
22	築ヶ鼻3号墳	多可町	託賀郡	9.8	1.35	1.8	3石～	無	TK43～TK209	II b
23	奥豊部1号墳	多可町	託賀郡	9.4	1.5	不明	2石	無?	TK209	II b

※①数値の( )内は推定値。※②大谷古墳は本稿の基準によれば大型には該当しないものの編年上重要な位置にある資料であるため掲載している。※③築造時期の網掛けは出土須恵器の年代。実年代については、陶器編年および東山古墳群における土器編年を参照し、TK43=6世紀後半、TK209=6世紀末～7世紀初頭、TK217=7世紀前葉～中葉、TK46=7世紀後葉とする（田辺1981、菱田1999）。

室が導入されてほどなく無袖の石室が築造されることから、それらの資料の検討をおこなうことは地域の石室編年を再検討する上でも重要な作業といえる。

そこで、城山1号墳の位置づけをおこなう前提作業として、播磨地域の中央～東部にあたる市川と加古川流域の資料を中心に大型の無袖横穴式石室の形態的特徴を確認し、河川ごとの比較検討をおこないたいと思う。

まず、本稿において対象となる大型の無袖横穴式石室（以下、大型無袖石室）を抽出する。播磨の無袖横穴式石室については、大多数の資料が全長7m以下で占められており、有袖式石室に比べて規模は縮小する傾向にある。そうした中でも、丹羽氏がすでに指摘しているように、全長7mを超え有袖式石室と比べても大型の部類に入る石室がいくつか存在しており、本稿でもこれらを大型無袖石室ととらえたい。

市川流域及び加古川流域に存在する大型無袖石室を検索すると、現時点で23例の資料が確認できる（図13、表1）。まず各古墳の位置を見ると、一見して各河川流域において海岸部よ

りも上流側の山間部に多く存在しており、城山1号墳が所在する市川の上流域付近においても大型無袖石室が多く築かれていることがわかる。旧郡名でいうと、神前郡及び託賀郡、賀毛郡北部の領域に多く分布しており、下流域では飾磨郡と美囊郡の一部の地域に認められる程度で、他の郡領域では現状確認できない。築造時期については、最も古いと考えられるのが市川流域では見野6号墳、加古川流域では窟屋1号墳や上三草古墳群牧場内古墳、築ヶ鼻3号墳などでTK43型式期頃とされ、比較的古い段階には下流域に多く分布することがわかる。では次に、河川ごとの資料の様相について見ていきたいと思う。

市川流域の様相 (図14)

まず市川流域の様相について見ていくと、下流域においてまず始めに見野6号墳が築造される。その後、7号墳がそれに後続する中で、周辺の火山古墳群においてもTK209型式期には大型無袖石室が出現する。石室の構造については、見野6号墳の段階から、奥壁や側壁に非常に大型の石材が使用され、奥壁の基底部分は横長の大型石材1石を据えるかたちで構築されている。また、前壁となる天井の段差が確認でき、無袖であるものの、天井の構造によって

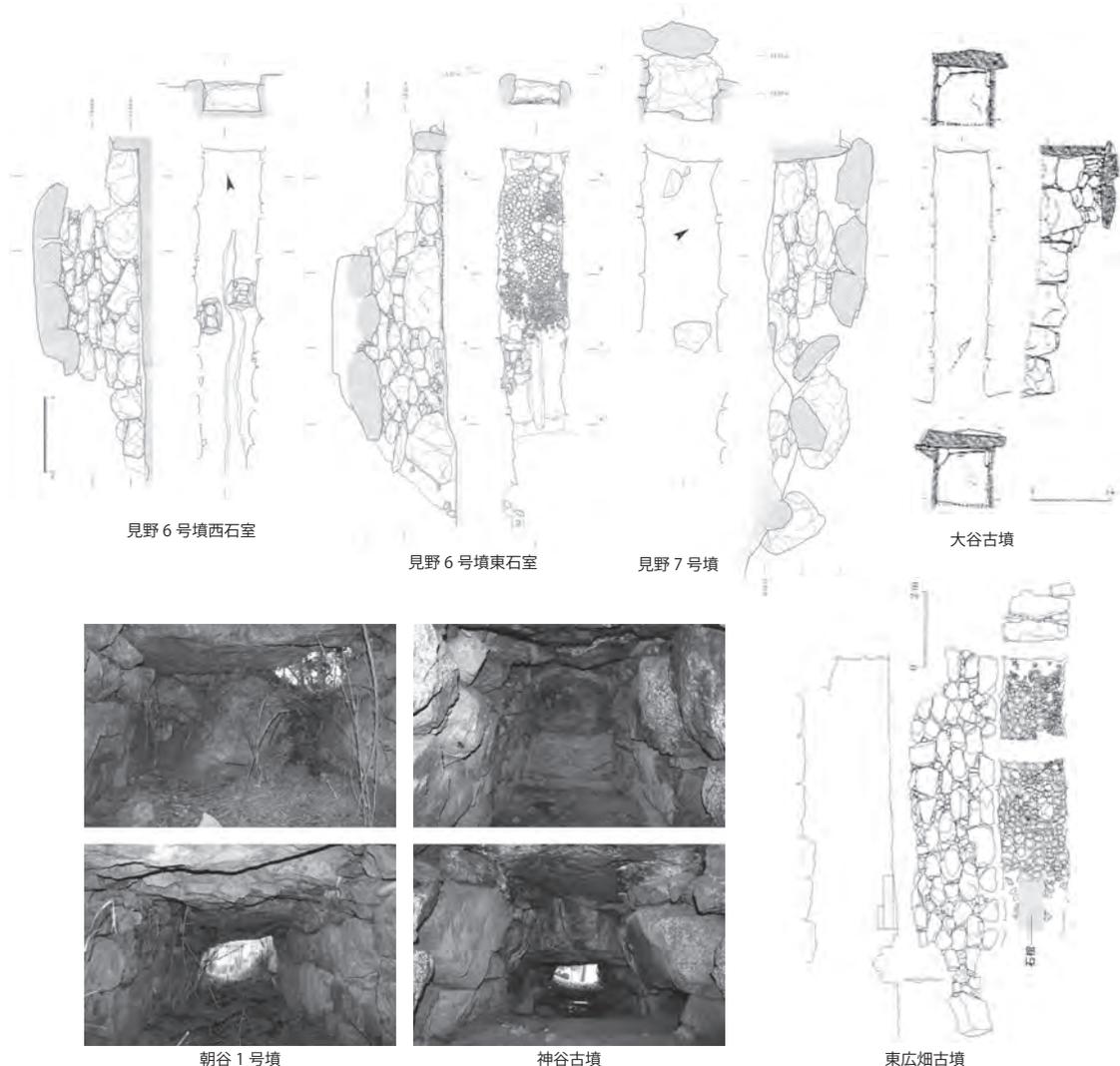


図14 市川流域の大型無袖石室 (石室図面：縮尺 1/200)

玄室と羨道の区別をつけている。これらの特徴は、周辺の火山2・3号墳にも認められる。

中流域以北では、TK209 型式期に東広畑古墳が築造され、それに後続して対岸の朝谷1号墳や神谷古墳が築造される。いずれも、奥壁は見野古墳群と類似した構造を採用しているが、朝谷1号墳のみ前壁の無い構造となっている。この違いは築造された時期差と捉えることもできるが、後述するように前壁の有無は何らかの地域差が表出している可能性を想定できることから、当地域では異なる系譜をもつ大型無袖石室が混在しているものと考えたい。

さらに上流域の大谷古墳では、前壁の有無は不明であるものの、奥壁を大型の一枚石で構成し、側壁の下半部を基底石1石でまかなう構造となっている。石材の大型化がピークに達しており、当地域の最終末期の古墳に位置づけられることから、TK46 型式期以降の築造と推定される。

そして、最上流域に位置する城山1号墳は、奥壁に大型石材を2段積みして構築している。側壁については、流入した土砂の影響により判然としないものの、横長の基底石を据えて目地を通し、その上に小型の石材を積みながら隙間を礫で充填しつつ構築している。前壁となる天井石は認められない。現状において古墳群内で最も新しい古墳と推定され、奥壁の構築状況などにより、先述した大谷古墳の前段階の古墳と考えられることから、TK217 型式期頃の築造と考える。

以上のように、市川流域の石室のほとんどは奥壁基底石に大型石材1石を置く形態を採用している。また、下流域ほど前壁を有している資料が多く、有袖式石室からの影響を見て取ることができ、中流域以北になるにつれ、玄室と羨道の意識が石室の構造上から曖昧となっていることがわかる。

#### 加古川流域の様相（図15）

次に加古川流域の様相について見ていきたい。下流域で唯一確認できるのが全長10.85mの大型石室である窟屋1号墳である。使用石材は比較的小ぶりの石材を使用し、側壁についても基底石と上段で石材の区別は見受けられない。前壁の有無は不明であるが、出土須恵器からTK43 型式期頃の築造と考えられる。それから、やや上流の加西市南部にTK217 型式期頃の築造と推定される新池1号墳がある。石材の崩落と土砂の流入が激しいものの、前壁を有しており、周辺の有袖式石室の退化形態として位置づけられる資料である。

また、同じ賀毛郡内の加東市域では複数基の資料が確認でき、最も古いと考えられるのが上三草古墳群牧場内古墳である。奥壁の基底部に3石以上の石材を使用しており、側壁についても、比較的小ぶりの石材を6～7段積みで構築している。前壁は有しておらず、周辺の石室との比較から、TK43 型式期頃の築造と推定できる。加東市域でこれに後続するのは、奥壁に大型石材を使用する資料ばかりで、吉馬櫃坂A-1号墳や四ツ辻5号墳、秋津9・11号墳などではいずれも奥壁基底部を1石で構成している。これらの資料の前壁構造は不明なものが多く、唯一確認できる秋津11号墳は前壁を有していない。

さらに加古川上流域において、右岸の山麓部に位置する寺内7号墳では、奥壁に横長の大型石材を3段積みして構築している。前壁の有無は不明であり、出土須恵器の内容からTK217 型式期の築造と考えられる。

最後に、北播磨の最奥部に位置する多可町では、首長墳墓群である東山古墳群に大型無袖石

室をもつ 11・12 号墳が存在する。奥壁の構造は、11 号墳が大型石材を 2 段積みする構造であるのに対して、12 号墳は各段を複数の石材で構築している。側壁の石材も 11 号墳は比較的大型の石材を 4～5 段積みで構築しているのに対して、12 号墳はより小型の石材を細かく積み上げていく構造となっており、対照的な様相となっている。それぞれの築造時期については、出土須恵器から 12 号墳は TK217 型式期、11 号墳はそれに後続する時期と推定される。東山古墳群の西側の丘陵に所在する安楽田 1 号墳は、前壁を有しておらず、奥壁石材が大型する傾向にある点から、東山 11 号墳に近い時期と推定できる。

そして、東山 12 号墳の類例としてあげられるのが、築ヶ鼻 3 号墳と奥豊部 1 号墳である。いずれも小型の石材を細かく積み上げる構築法を採用しており、奥壁も各段を複数の石材で構成している。前壁を有さない点も共通する要素である。奥豊部 1 号墳は出土須恵器から TK209 型式期頃の築造と考えられ、築ヶ鼻 3 号墳もそれに近い時期の築造と推定される。

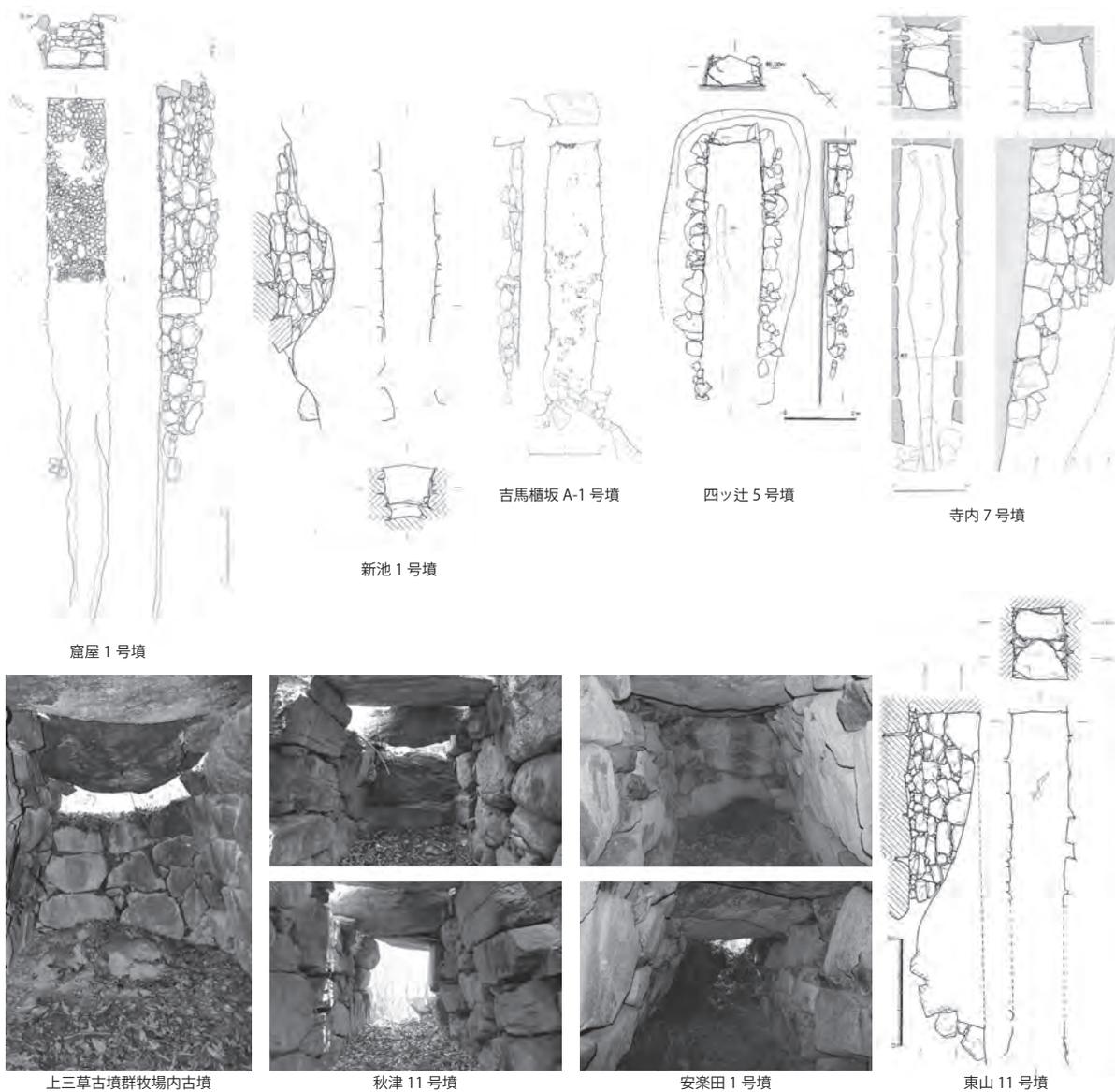


図 15 加古川流域の大型無袖石室（石室図面：縮尺 1/200）

加古川流域の様相についてまとめると、奥壁の各段を複数の石材で構築する構造が概ねTK43～TK209型式期に多いことがわかる。また、市川流域に比べて前壁をもたない事例が多く、石室の各壁が奥壁から開口部まで一直線となる石室構造が、地域に横穴式石室が導入される段階から成立している点は大きな特徴といえる。

#### 城山1号墳の位置づけ

以上の検討を踏まえて、石室構造からみた城山1号墳の位置づけについて考えてみたい。各河川流域における大型無袖石室の形態の特徴としては、奥壁基底部の石材数と前壁の有無に分布の傾向が反映されやすいということがわかってきた。そこで、奥壁基底石を1石のみで構築するもの（Ⅰ類）と2石以上で構築するもの（Ⅱ類）、前壁の有るもの（a類）と無いもの（b類）にそれぞれ分類した上で、その分布を確認してみたい（表1、図16）。

まず、奥壁の構造については、Ⅰ類が多くみられる市川流域に比べ、加古川流域ではⅡ類が多く採用される点を指摘できる。ただし、TK217型式期頃には加古川流域でも、多可町などの一部の地域を除いて、ほとんどの資料がⅡ類を採用しており、現状では市川流域で石材の大型化がより早く進行したものと解釈したい。

次に、前壁の有無をみると、前壁をもたないb類の範囲は、現状では各河川の中流域以北に限られ、先に述べた加古川流域の事例だけではなく、市川の中・上流域でも確認できる。

では、そのb類を採用している城山1号墳を他のb類の石室と比較してみると、城山1号墳は奥壁に大型石材を使用しているものの、側壁の石材には総じて小型の石材を使用し細かく積んでいる点が特徴としてあげられる。そのような側壁の様相は、石材の大型化が進行している市川流域の朝谷1号墳や大谷古墳といった事例よりも、築ヶ鼻3号墳や奥豊部1号墳などの多可町の事例と類似しており、河川を越えた東西方向の共通性を指摘できる（図17）。

そうした特徴が河川の単位を超えて共有されるということは、何らかの地域間交流がおこなわれる中で情報が伝わったものと考えられ、現時点では、TK217型式期に築造された城山1号墳の石室が、多可町を中心とする大型無袖式室の分布圏からの影響を受けて成立したものと考えたい。

ただし、奥壁の構造についてみると、城山1号墳（Ⅰ類）と多可町の事例（Ⅱ類）では異なる様相がみとれる。城山1号墳の方が後出することから石材の大型化は時期的な問題と捉えられなくもないが、城山1号墳の前段階の築造と推定される城山2号墳の奥壁には小型石材を細かく積む構造が採用されており、両者には形態上の大きな開きが認められる（写真16）。

そのため、先に述べた東西間の関係とは別の影響関係が起因してこの奥壁構造が採用された可能性も考慮する必要があり、この点については、隣接する他地域の様相などとも比較しながら今後さらに検討が必要であると考えられる。

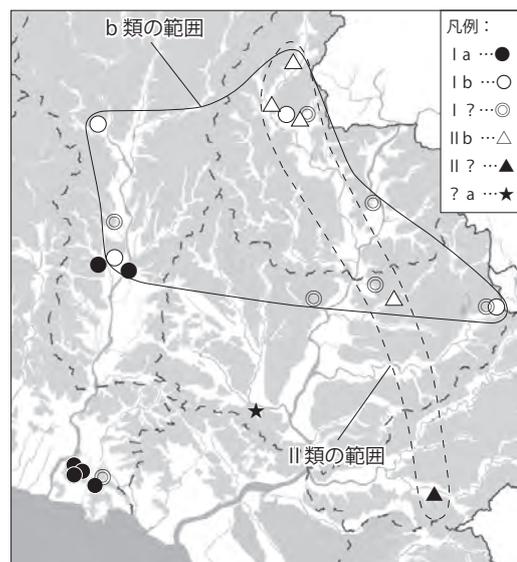


図16 大型無袖石室の形態別分布

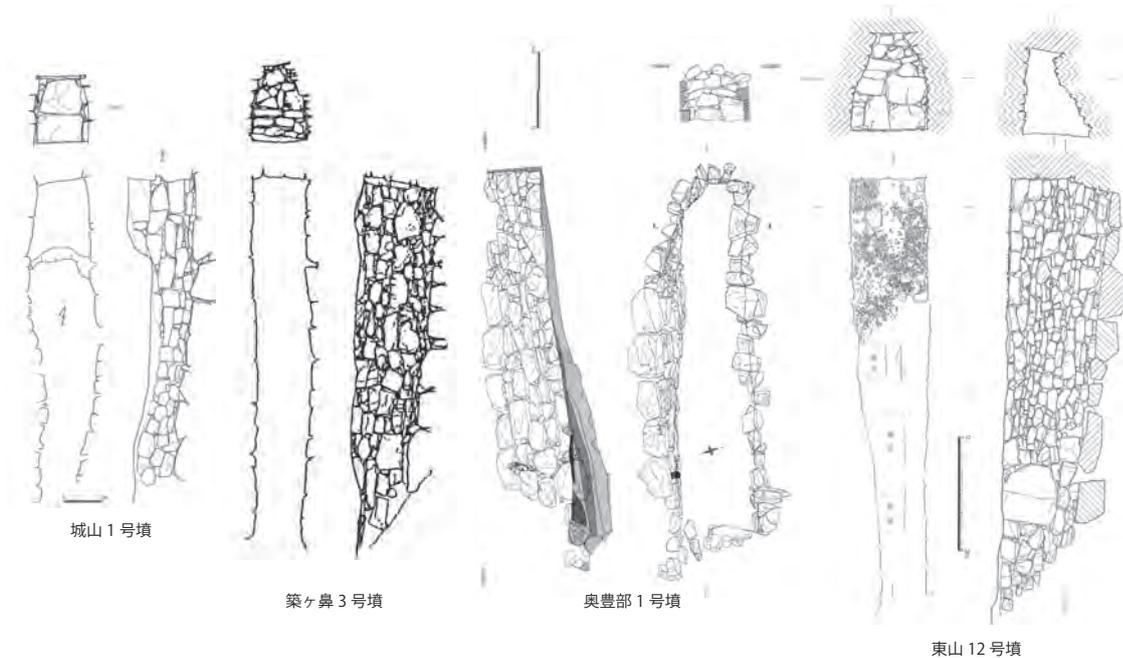


図17 城山1号墳の類例（縮尺1/200）



写真16 城山2号墳

まとめ

城山1号墳は7世紀前半代に築造された大型無袖石室であり、その構造は播磨地域北部における河川を越えた影響関係の中で成立したものであることが検討の結果明らかになった。

当該地域における大型無袖石室の様相としては、地域に横穴式石室が導入されてから比較的早い段階に無袖石室が導入されていることを再確認し、その分布が各河川の下流域に

まで広がっていることを指摘できた。

また、資料の分布が集中するのは下流域よりも中流域以北の播磨北部地域であり、有袖式石室との形態上の距離が著しく離れた構造が河川を越えて共有されていることから、これまで指摘されてこなかった地域性の存在が想定できるようになった。

これまで播磨地域では、文化の伝播ルートは河川を介した南北方向の動きが主流であるとされ、東西方向の交流は下流域の海岸沿いルートが取り上げられる程度であった。今回の城山1号墳の調査により、古代の播磨北部地域においても東西方向の交流の一端を確認できたことは大きな成果であるといえるだろう。（藤原）

【図版出典】

図13：筆者作成 図14：筆者作成、石室図面は各報告書より転載 図15：筆者作成、石室図面は各報告書より転載 図16：筆者作成、石室図面は各報告書より転載 図17：筆者作成 写真16：筆者撮影

表1：筆者作成

※大谷古墳の石室図面については、実測者である中濱久喜氏より転載のご許可をいただいた。末筆ではあるが

記して感謝申し上げます。

【参考文献】

- 高松雅文・榊真麻 2007「地域概説 播磨の横穴式石室」『研究集会 近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会  
田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店  
中浜久喜 2001「播磨における横穴式石室の構造と変遷」『横穴式石室からみた播磨』播磨考古学研究集会実行委員会  
丹羽恵二 2002「多可郡における大型無袖石室について」『東山古墳群Ⅱ』多可郡中町教育委員会・京都府立大学考古学研究室  
播磨考古学研究集会実行委員会 2001『横穴式石室からみた播磨』第2回播磨考古学研究集会資料集  
菱田哲郎 1999「東山古墳群出土土器の編年とその特色」『東山古墳群Ⅰ』多可郡中町教育委員会・京都府立大学考古学研究室

【報告書】

- 見野 6・7号墳：姫路市教育委員会 2009『姫路市見野古墳群発掘調査報告』  
東広畑古墳：福崎町教育委員会 2015『東広畑古墳Ⅰ』福崎町埋蔵文化財調査報告書 13  
大谷古墳：中浜久喜 2014「西播磨の終末期古墳」『終末期古墳からみた播磨』第14回播磨考古学研究集会の記録  
窟屋 1号墳：兵庫県教育委員会 2009『窟屋 1号墳』兵庫県文化財調査報告第353冊  
新池 1号墳：千葉太郎 2010「新池 1号墳」『加西市史 第七巻』史料編 1 考古、加西市  
吉馬櫃坂 A-1号墳：吉馬古窯跡群埋蔵文化財調査会 1990『社・吉馬』  
四ッ辻 5号墳：加東郡教育委員会 1989『四ッ辻古墳群』加東郡埋蔵文化財報告 8  
寺内 7号墳：西脇市教育委員会 2004『寺内古墳群』西脇市文化財調査報告書第13集  
東山 11・12号墳：多可郡中町教育委員会・京都府立大学考古学研究室 1999・2001『東山古墳群Ⅰ・Ⅱ』中町文化財報告 20・25  
築ヶ鼻 3号墳：前掲丹羽 2002  
奥豊部 1号墳：多可郡加美町教育委員会 1999『奥豊部 1号墳』加美町文化財報告 3